

「ホームレス」であること

——名古屋市におけるホームレスの経験とその解釈——

二 文 字 屋 脩*

What it is to be “*Homeless*” The Experiences and Interpretations of Homeless People in Nagoya, Japan

NIMONJIYA Shu*

This paper will discuss what it means to be “homeless,” as seen through homeless people's daily experiences and its interpretations, in the case of the city of Nagoya, Japan. In Japan, in sociological studies of homeless people, the word “*homeless*” is often viewed as/considered to be a controversial term with various social implications. For this reason, sociological studies instead use the term “*nojukusha* (‘rough sleepers’ or ‘street homeless’).” However, homeless people use the word “*homeless*” to indicate themselves in their daily life; therefore, if we will approach their “lived experiences” in anthropological perspective, the word “*homeless*” can be a key concept to understand their social lives. Moreover, I assume that “home” is also an important concept to consider when thinking of what it means to be “homeless”. Here, the concept does not mean a physical space (a house) but rather means the general behaviors and values which are socialized results in dominant society. In other words, these concepts forge their daily life as “homeless” people in Japan. Because they are not “homeless” by nature, considering the concepts of “*homeless*” and “home” based upon the narratives of these individuals is useful to understand their social lives.

キーワード: 「ホームレス」, 「ホーム」, 生きられた経験

Keywords: “*Homeless*”, “Home”, Lived Experiences

* 首都大学東京大学院人文科学研究科 ; Department of Social Anthropology, Graduate School of Humanities, Tokyo Metropolitan University, 1-1, Minamiosawa, Hachioji, Tokyo, 192-0397/ palapasuku_get_stone1985@hotmail.co.jp

はじめに

日本のホームレスを対象とした学術的研究の多くは、主に社会学によって担われてきた¹⁾。社会学的研究は、都市下層研究の一研究領域である寄せ場研究[e.g. 青木 1989; 西澤 1995]²⁾と連続性を保持しつつ、その研究課題は多岐にわたる。とりわけ寄せ場研究は「周辺」から「中心」を逆照射するという点で人類学の基本的視角と親和性があり[ref. 田巻 1999b]、またホームレスの実態論や生活構造論を展開する近年の社会学的研究の問題設定は人類学のそれに近い[e.g. 北川 2001b; 2002; 妻木 2003; 山北 2006]。また他方で、欧米、とりわけアメリカでは、シカゴ学派の旗手の一人として著名なアンダーソンの先駆的研究[アンダーソン 1999; 2000 (1923)]以降、ホームレス研究は一つの研究領域として確立しており、『世界ホームレス百科事典』[デーヴィッド編 2007(2004)]が出版されていることから、その学術的関心が高いことを窺い知ることができる。特にアメリカでは、「ニュー・ホームレス」³⁾を含めた、ホーリスティックかつ通文化的な研究が1980年代以降蓄積されており、テーマも多様である[e.g. Glasser and Bridgman 1999; Baxter and Hopper 1981; Desjarlais 1997; Glasser 1994]。

しかしアメリカにおける人類学的研究の状況とは大きく異なり、日本のホームレスに関する人類学的研究は、ほぼ皆無といえよう。すでに「都市人類学」の名の下に、70年代から都市を人類学的対象とする視角が確立していたなかで、都市に特有の存在であるホームレスがその重要な研究対象となりえた可能性は十分にあったと考えられるにもかかわらず、である。その背景には、研究者個人の興味関心や当時の理論的趨勢などが影響しているのかもしれないが、いずれにしても、様々な社会環境に生きる人間存在の多様なあり方や、人びとの「生きられた経験 (lived experiences)」へと接近しようとする人類学的志向性にと

1) 社会学の他には、社会福祉学[e.g. 岩田正美 2000]や社会政策学[e.g. 社会政策学会編 1999]による研究蓄積がある。

2) ここで挙げた青木の研究は、近年の寄せ場(労働者)研究ないし野宿者研究の礎石でもある。というのも、寄せ場(労働者)の「病理性」や「後進性」を強調して階級論を展開したそれまでの社会病理学的研究と労働経済学的研究に対し青木は、「差別論」という新しい視点を打ち出し、これが今日の社会学的研究に大きな影響を与えているからである[林 2004]。

3) 80年代のアメリカでは、「ニュー・ホームレス」と呼ばれる、それまでの単身の白人男性が中心だった「オールド・ホームレス」と異なる、黒人やヒスパニック、さらには母子家庭や若年層などの貧困の「再発見」があり、社会問題として顕在化した[平川 2003]。他方、寄せ場という特殊な労働市場を経由していないホームレスの増加に直面して、社会運動家である笠井(新宿連絡会)はそれを「ニュー・ホームレス」と呼んでいるが[笠井 1995]、アメリカのそれとは意味内容が異なる。

って、ホームレスもまた重要な人間存在であることに変わりはない。

本稿の問題関心を貫いているのは、「ホームレスは生得的にホームレスなのではない」という至ってシンプルな、しかし最も重要であるように思われる事実である。これを踏まえて本稿は、日本・名古屋市のホームレスを対象に、彼らの語りを手がかりに、「ホームレスであること」とは一体どのようなことなのかについて論じる⁴⁾。そこで次章において、いわゆる社会問題としての「ホームレス問題」について概観する。とくにこの章では社会学の先行研究に依拠しながら、ホームレスが「社会問題」として構成されていく経緯を確認し、ホームレスを取り巻く現況を把握したい。そして続く二章と三章では、ホームレスの語りを事例に、「ホームレスであること」の重層的なリアリティの提示を目指す。その際本稿では、「ホームレス」と「ホーム」を分析概念として提示し、彼らの自己認識とその解釈を考察する。これらの作業を通じて、結論に至っては、「ホームレスであること」とは「ホーム」を参照軸に経験される「ホームレス」という生き方であることを指摘したい。なお、社会学的研究では「ホームレス」を「野宿者」と表記し、それを分析概念として用いているが、本稿ではあくまで「ホームレス」⁵⁾を用いる。それは後述するように、この語がホームレス自身によって一般的に使用される「生きた概念」だからであり、最後に述べるように、この点にこそ人類学における「ホームレス研究」の基本的な出発点があると考えられるからである。

本稿で提示する事例は筆者自身が行った実地調査で得られたものである。筆者は愛知県・名古屋市中心部をフィールドとし、2007年8月から9月の約一カ月にわたる住み込み調査を経て、それ以降から現在に至るまで、二、三カ月に一度のペースで各回数日から一週間の住み込み調査を行っている。調査中は名古屋市でのホームレス支援活動に部分的に関わってはいるものの、これらの調査は基本的に「学術調査」として対象者の同意を得た上で行ったものである。

4) 本稿は欧米に特徴的なホームレススティック且つ通文化的な研究を試みるものではない。なぜなら、日本のホームレスと欧米のそれとは、両者におけるホームレスの歴史的過程や存在様式、さらには抱える問題の性質が大きく異なるからである〔青木 2000: 102〕。そもそも、欧米でいうところの“homeless people”とは、「ホームレス状態(homelessness)にある人びと」という、不安定な居住形態をもつ人びと全般を包括的に捉えた概念である。これに従えばいわゆる「ネットカフェ難民」なども含まれるが、本稿はあくまで、一般的に言うところの「路上生活者」ないし「野宿者」を「ホームレス」としている。

5) 本稿では、括弧なしの“ホームレス”と、括弧付きの“「ホームレス」”の二つの表記を用いる。前者は「ホームレス」という呼称によって指し示される人びとに言及する際に使用し、一方後者はその用語ないし概念それ自体を指し示すために使用する。

なお、所謂「三大寄せ場」の山谷（東京）・釜ヶ崎（大阪）・寿町（横浜）とは異なり、名古屋市の寄せ場である笹島はドヤ街（簡易宿泊所）を持たない⁶⁾。それゆえ名古屋市ではホームレスが広範囲にわたって散在しており〔田巻 1999c: 230〕、中心部ではとくに若宮大通公園や久屋大通公園、鶴舞公園、中村公園、名城公園、名古屋駅、金山地区周辺、熱田神宮などに多い。ホームレスの実態を把握するために 2003 年に実施された全国調査では、目視調査で確認された 25,296 人のうち、名古屋市は大阪市、東京都 23 区に次いで三番目に多い 1,788 人が確認され〔ref. 厚生労働省 2003〕、2010 年の概数調査では 502 人が確認された〔ref. 厚生労働省 2010〕。

I 「ホームレス」の発見とその問題性

1 ホームレスの「増加」と「社会問題化」

1990 年代初頭、日本は「バブル経済崩壊」という経済危機に直面し、その後慢性的な景気後退を経験した。そして日雇労働という不安定な雇用形態にあった労働者たちの多くは失業に追いやられ、公園や河川敷、高架下、駅舎といった「路上」に象徴される公共空間に新たな生活場所を求めた。その結果、それまで「浮浪者」や「ルンペン」と呼ばれてきた路上生活者は、確実にその数を増加させ、とくに都市中心部に可視化した。

「都市下層の一部」としてのホームレスの増加に現代都市の変貌を察知した多くの社会学者が指摘するように、その背景には「寄せ場の弱体化」がある〔e.g. 青木 1999a; 2000; 北川 2001a; 島 1999; 田巻・山口 2000; 中根 1998; 1999a; 1999b〕。「寄せ場」とは概して、日雇労働者に就労先を提供する、逆に言えば日雇労働力を供給する労働力市場のことである。高度経済成長期、そこは建設業や製造業を中心とした安定的な労働力供給基地として、日雇労働者たちの受け皿の機能を果たしていた。しかしバブル経済崩壊と長引く景気後退により、寄せ場での雇用数は減少し、多くの日雇労働者が失業に追いやられた。そして寄せ場に並存するドヤ街を利用することが経済的に困難になることで、多くの労働者がホームレス化するに至ったのである。

このような説明は「ホームレス問題」に基本的なプロットだが、一方でより

6) 戦前「水車地区」と呼ばれた地域の一部にあたる笹島は、オイルショック以後、都市計画の過程でドヤ街が解体された経緯がある。笹島の歴史やそれを取り巻く名古屋市の状況については、岩田と田巻の論考を参照されたい〔ref. 岩田圭司 1999; 田巻 1999a; 1999c〕。

マクロな要因、すなわち、経済構造の変化といった要因が指摘されてもいる[e.g. 青木 1999b; 2000; 田巻 2003; 岩田正美 2000; 2007]。例えば「グローバル経済化」[田巻 2003]や「サービス経済化」[岩田正美 2007]といったものがそれである。前者においては、労働力の安価な海外への生産工場の移転による国内労働市場の縮小化、そして外国人労働の日本の労働市場への参入による就労機会の減少が生じる。一方後者においては、サービス業の増加による若者や主婦といった新たな労働者層の労働市場への参入と「非正規雇用」の拡大が助長され、また労働者のホワイトカラー化が進むことで、単身の中年男性を中心とする単純労働力の需要が減少する。

こうした新たな社会経済体制への移行によるホームレス増加の説明は、確かに寄せ場の弱体化による原因論と、労働市場の縮小化とそれによる失業者の増加という点で基本的に一致するものである。しかし「ホームレス」が必ずしも寄せ場を経由したものとは限らないことを、後者の視点が示唆していることはここで確認しておくべきであろう。だがいずれにしてもこうした経済的な諸要因から、多くの労働者がホームレス化することとなった。そしてその数は景気回復の契機を見ない長期的な不況のなかで増加の一途を辿り、都市住民や行政、そしてマスメディアによって「発見」されることとなる⁷⁾。

1995年、東京都は『新たな都市問題と対応の方向性―「路上生活」をめぐる』[東京都企画審議室 1995]という報告書を提出した。副題から察しがつくように、この報告書は主に東京都区部を中心に顕在化したホームレスの増加を受けて作成されたものである。だが、「ホームレス」は決して「新しい」ものではない。そもそもホームレスのような路上生活者は、資本制社会の所産であり[青木 1989: 108]、「貧困の主要なタイプの一つ」[岩田正美 2007: 99]である⁸⁾。

しかし先の報告書では、ホームレスは「新しい都市問題」として扱われている。何故に、ホームレスは新しかったのだろうか。そのように認識されるに至った要因には、主に二つの理由が挙げられる。一つは、都市中心部におけるホ

7) しかし90年代当時は先の全国調査などは実施されておらず、各地方自治体が独自に行ったものしかない。したがって全国レベルで具体的にどれほどの失業者がホームレス化したのか、詳細は不明である。

8) 新聞記者やフリーライターといったジャーナリスト、公務員、さらには当事者自身による浮浪者ないしルンペンに関する記述や出版物の数は枚挙に暇がない[e.g. 郡 1976; 林 1976; 工藤 1933; 今川 1987]。このことが意味しているのは、路上生活者が「ホームレス」以前には「浮浪者」や「ルンペン」と呼ばれていたに過ぎず、むしろ広く知られた存在であったということである。

ームレスの可視的な形での数的増加である。すなわち、従来は「都市空間の一部」である寄せ場にのみ存在していた都市下層民がホームレス化し、生活場所を求めて生活資源の多い都市中心部に現れたというのが、「新しい（社会）問題」として認識された所以であった〔島 1999〕。そしてもう一つは、非日雇労働者たちのホームレス化である。例えば先の東京都の報告書にあっては、日雇労働未経験者が相当数（全体の約四割）含まれていたことが強調されている〔ref. 東京都企画審議室 1995〕。確かに「浮浪者」や「ルンペン」を視野に含めると、「ホームレス」は決して「新しい」ものでない。しかし他方で、東京都がそれを「新しい」と認識した基本的な背景には、90年代初頭のバブル経済崩壊とその後の経済体制の構造的転換に起因する大規模な社会経済的変化があったという点で、何ら根拠の無いものではなかったともいえる⁹⁾。

2 「ホームレス」の問題性

ホームレスの増加とともに、「ホームレス」は一般に広く知られるものとなった。その主因として、マスメディアの報道と行政の一般用語的用法が挙げられる。

マスメディアによって初期に「ホームレス」が使用されたのは、二人の若い男性が当時 63 歳のホームレスを川に投げ込み死亡させたという、1995 年に大阪・道頓堀で起きた「道頓堀ホームレス殺害事件」、そして西新宿のダンボールハウスを強制的に撤去しようとした東京都とそれに抗議するホームレスとが激しく衝突した 1996 年の「事件」であった。また行政においては、「ホームレス」の社会問題化を背景にそれが一般用語化した。具体的には、関係省庁および関係地方公共団体による「ホームレス問題連絡会議」（1999 年 5 月）や、「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」（2002 年 8 月）などが挙げられる。

しかし他方で、ホームレスの支援活動に携わる民間団体や社会学者は、「ホームレス」の問題性を指摘し、「野宿者」や「野宿労働者」などを積極的に用いている。「野宿者」は元々、1983 年に横浜で起きた「横浜浮浪者連続殺害事件」

9) しかし「新しさ」と「社会問題」が結びつく必然性はない。なぜならホームレスの増加とその存在自体が、「社会問題」を構成するわけではないからである〔中根 1998: 1〕。故に社会問題の構成には、それを「問題」として設定し、どのように問題化するのかという政治的思惑があり、常に何かしらのポリティクスが生じていると考えられる。たとえば社会学者の中根が論じるところによれば、東京都が「新しい都市問題」と設定したのは、寄せ場が孕む問題性を顕在化させないための、つまり治安管理を補完するものに過ぎなかった従来の寄せ場（とくに山谷）対策の「問題性の隠蔽」という思惑があったという〔中根 1998: 1999b〕。

のマスコミ報道に対する社会運動体からの抗議に端を発する〔中根 1999b; 2002〕。この抗議は本来、「浮浪者」という差別語に対するものであったが、「ホームレス」もまた「浮浪者」の「スマートな言替えに過ぎない」〔西澤 1997: 79〕として、また「実際の問題」を隠蔽するものであるとして拒否される。「実際の問題」とはつまり、『アブレ（失業）によって野宿を強いられている』という寄せ場の問題性を告発する社会問題カテゴリー〔中根 2002: 5〕をめぐる問題である¹⁰⁾。つまり「野宿者」には、「ホームレス」の問題性を回避しようとする意図が込められているのである。

だがここで看過してはならないのが、「ホームレス」はもはや、単なる社会問題カテゴリーや表象のレベルに留まっておらず、むしろ一般用語化の過程で、この語には否定的なニュアンスが吹き込まれ、社会通念化しているという現況である。「ホームレス」として他者を他者化するという「カテゴリー化の暴力性」〔狩谷 2001〕に加えて、「汚い」や「孤独」、「怠け者」、「みじめ」といった根拠のないイメージが都市住民の間で広く流通している〔島 1999: 208-212〕。そしてこのような社会通念は時として、若者などによる「野宿者襲撃」〔e.g. 生田 2005; 狩谷 2002〕や「ニンビー（NIMBY）現象」〔ギル 2007〕¹¹⁾へと具現化する。また他方で、ホームレス化の要因は新自由主義的な自己責任論へとしばし還元され、その背景にある構造的要因が無視されもする。したがってこうしたホームレスを取り巻く広い意味での社会状況を踏まえて言うならば、「ホームレス」はもはや単なる社会問題カテゴリーではなく、むしろ一方的なスティグマとその暴力性が露骨に差し向けられる具体的な形象なのである。

3 定義と一般化の困難さ

経済的要因により増加したホームレスは、「単身の中高年男性」という社会一般のイメージと基本的に一致する。しかしホームレスは、全て寄せ場という特

10) 「野宿労働者」は、彼らは単なる「野宿者」であるだけでなく、「（日雇）労働者」でもあるとして、労働者が野宿へといった過程そのものを問う呼称である〔青木 1996〕。また野宿者を支援する運動では近年、「野宿生活者」を使用する動きがあり、「生活保護を受ける権利」の主張だけでなく、「路上で生活する権利」などの多様な権利主張を含めたものとして採用されている〔中根 1999b: 92〕。

11) 「ニンビー（NIMBY）現象」とは、“Not In My Back Yard”（「うちの裏庭、つまり、うちの近くはお断り」）の頭文字をとった略語である。これは、「ある施設の必要性を認めても、自分の家の近くには建ててほしくない」という公的施設建築反対などの市民運動の動機であり、「絶対的な排除」ではなく、「特定の排除」を指している〔ギル 2007: 2-3〕。したがってこの場合「ニンビー現象」とは、シェルターや一時避難所などの施設建築計画に対する周辺住民の抗議運動を指している。

殊な労働市場を経由した人びとだけで構成されているわけではない [ref. 笠井 1995; 島 1999]。慢性的な景気後退による失業に加え、家族関係や職場関係、また個人の性格による「社会的墮落」など、その要因は必ずしも単一かつ単純ではない。とくに 90 年代後半以降の特徴として、女性や若年層（20 代から 40 代前半）のホームレスが確認されており [中根 1999a; 林 2006]、年齢や性別、またホームレスに至った要因など、その背景は多様かつ複数である。したがって「ホームレス」の一般的定義には考慮せねばならない変数が多すぎるため、定義という作業は困難を極める。

例えばこうした動向を「新しい現象」と捉えた青木は、「野宿者」を「野宿という現前の事実」において定義する [青木 2000: 104]。青木がそのようにして定義を試みるのは、「野宿の背景と中身の多様性をできるだけ豊かに取り出す道を確保しておきたいという意図」によるが、しかし同時に、その定義は「つねに条件つきでしか行うことができない」とも指摘する。つまり包括的な定義は、「新しさ」の前ではその妥当性を常に失いかねない状況にあるのである。

したがってこうした状況下において必要とされる人類学的営為は、「ホームレス」と呼ばれる人びとの一般化を志向しながらも、多様性ないし複数性を念頭においた民族誌的記述を書き重ねていくことであろう。このことを通じて、社会問題として認識される表象ないし観念のレベル（＝「ホームレス」）と、実際に路上を生活空間とする実体のレベルとの乖離に、「ホームレスであること」とは一体どのような事態を指すのかを問いていくことが重要であると思われる。そのため、本稿で扱う名古屋市のホームレスを「ホームレス」として安易に一般化することには慎重でなければならない。このことを自覚した上で「ホームレスは生得的にホームレスなのではない」という明白な事実をもう一度確認すれば、「ホームレス」と呼ばれる人びとの日常的経験とその解釈を焦点化することは意義のあることである。そこで本稿では、まさにこの点に焦点を当てた語りを取り上げ、「ホームレスであること」について考察していきたい。

II 外なる「ホーム（レス）」と、内なる「ホーム（レス）」

1 「ホームレス」の意味

「ホームレスは生得的にホームレスなのではない」という基本的事実は、往々にして忘却されるがために、「ホームレス」はあたかも所与のものとして本質主義的に認識され、また根拠なく実体化されるという事態をしばしば招く。確か

に、社会学的研究が指摘するように、「ホームレス」を分析概念として用いることで、この語に纏わりつく差別性や、行政施策の問題性を隠蔽する恐れがある。また、「ホームレス」がカテゴリー化され、「新たな社会問題」として構成されていく中で、排除や差別といった暴力性が生み出される〔山口 2001〕。そしてそのような暴力が発生する場では、ドミナントな論理が横行し、「野宿生活」は「非自立的」あり、ホームレスは「社会生活からの逃亡者」とみなされていく〔山北 2006〕。故にこれらに自覚的であれば、「ホームレス」を分析概念として用いることにためらいが生じるのは当然である。

しかし本稿では、「ホームレス」をあえて積極的に用いたい。というのも、「ホームレスであること」の経験とその解釈といった主観的側面に注目する際に問わなければならないのは、定義やその社会的な問題性ではなく、どのような文脈においてホームレスが「ホームレス」という言葉を用い、それが彼らにとってどのような意味をもっているのかという、概念の「意味」だからである。つまり予見的に定義することのできない「ホームレス」は、彼らの日常的な経験とその解釈に「ホームレス」の意味を探ることを通じて、初めてその意味内容を明らかにすることができるのであり、本稿が「ホームレス」を使用し、「野宿者」を意図的に退けた理由はまさにこの点にある。

もちろん、社会学者が指摘してきた「ホームレス」の問題性に筆者も自覚的であるつもりである。だが一方で、この言葉のもつ暴力性、つまりドミナントな論理とその具現化にこそ、「ホームレス」が単なる社会問題カテゴリーではなく、それが何かしらの現実味を伴って現れる、実体的な側面が隠されていると考えることができる。それはまさに、西澤が近年論じた「檻のない牢獄」〔西澤 2005〕¹²⁾ともいうべき社会の現実を構成する一側面であり、この側面にこそ、ホームレスの「生きられた経験」を探る手がかりがあるといえるのではないだろうか。

2 実体化する「ホームレス」

実際、彼らが同じ「ホームレス」である他者に言及するとき、名前や愛称がある場合以外は、男性に対しては「とおちゃん」、女性に対しては「かあちゃん」がしばしば使われる。たとえば、「××公園に寝ているとおちゃんは…」や、「いつも炊き出しに来ているかあちゃんが…」といった具合である。この場合、これ

12) 西澤は「檻のない牢獄」を（1）排除の空間、（2）自己否定の空間、（3）死を待つ空間であるとして、「野宿者」の社会的世界を考察している〔ref. 西澤 2005〕。

らは「おじさん」と「おばさん」、ないし「××の旦那さん」と「××の奥さん」といったニュアンスで用いられている¹³⁾。したがって、互いに呼びあうときや、同様に路上生活を送っている他者に言及する際、「ホームレス」が用いられることはほとんどない。

だが時に、「ホームレス」がホームレス自身によって用いられることがある。しかし、彼らが「俺（たち）はホームレスだ」と語るとき¹⁴⁾、「ホームレス」は以上の文脈とは異なる状況において運用される。その状況とは、いわゆる「世間」との対比において、自己を位置づけようとするときである。つまり、「俺（たち）はホームレスだ」という常套句には、「世間」、すなわち「ホームレスではないもの」が念頭に置かれているのである。したがって、「ホームレス」の問題性に自覚的でありながらも、それが彼らの日常的経験を形作る重要な構成要素であり、その意味で「生きた概念」であるということを一先ずここで指摘しておきたい。そしてこのことを顕著に示している事例として、以下に、あるホームレスの語りを取り上げる。この事例を通じて、ホームレスもまた、「ホームレスであること」を所与のものとして、固定化して語ることがあるという状況が了解できる。

事例 1. 昭和区・鶴舞公園付近で野宿をする山田さん（仮名、当時 52 歳）による、襲撃の回想（2009 年 6 月、鶴舞公園付近にて）¹⁵⁾

この間もよお、若けえサラリーマンが二人、酔っ払って、その帰りなんだろうな、こっちにいちやもんつけて来やがってよ。「おめえらホームレスなんか目障りなんだよ！」なんて言いやがるから、『ホームレスでなにが悪いんじゃ！』って、こっちもつかかったのよ。そしたら俺のとかナカマのチャリンコ（自転車）を蹴飛ばし始めたからよ、俺すぐに頭に血がのぼ

13) こうした呼称は、「近くもなく・遠くもなく」[岩田正美 2000]と社会福祉学者の岩田が論じたような、ホームレスに特有の「距離の思想」[西澤 2005]であると考えることができる。つまり不信感や警戒心から、互いの「過去」については深入りせず、程よい距離感で付き合うという関係性は、匿名性を維持しつつも、一方で「同じ境遇にいる」という社会環境の親和性の表れでもある。

14) 確かに自らを「野宿者」と称する者もいるが、それは野宿者支援運動に関わっている人びとに多く、やはり一般的には「ホームレス」が多用される。

15) 本稿で提示する各事例は、筆者自身の現地調査で得たものであるが、それらは話者の傍らで筆者がメモを取り、後に文章化したものであるため、一言一句はすべて正確なものではなく、細かい部分は一部筆者の補足が混じっていることに留意されたい。

るじゃん、だから、ブチッときて、そばにあった木刀を投げつけてやったのよ。そしたらよお、サラリーマンの一人が「この野郎！俺たちを誰だと思ってんだっ！」つーからよ、（指を指して）そこのゴルフのやつ（ゴルフクラブ）をよお、掴んでさ、脅したんだよ。そしたら他の（ナカマの）自転車も蹴っ飛ばして逃げたんだよ。あっちのほうに。それで俺もそこで寝てたタカ（仮名、当時 45 歳）を起こして追っかけたわけ。で、あそこのビルの裏で捕まえてよ。あっちは酔っ払ってるからすぐに追いついちゃって、ゴルフのやつでボッコボコにしてやったのよ。顔以外をな。水ぶくれになるまで殴ったよ。そしたら警察が来てさ、近くに住んでるやつらが呼んだんだろうな。そして交番まで行ったわけ。ボッコボコにしたサラリーマンたちも。で、事情聞かれて、「そいつらがチャリンコ蹴っ飛ばしてふざけたこと言ってるから殴ったんだよ。自己防衛ってやつよ」って話したのよ。そしたらサラリーマンから話聞いてた別のお巡りがよ、「夜も遅いんだし、あんまり騒がないでよね」って言って、「もういいですよ」って言うんだよ。こっちはまだ腹が立ってたからさ、「こっちはまだやりたりねえんだ。あいつらと話つけさせろ。いちゃもんつけてきたのはあっちなんだからよ！」ってつかかったんだけど、一応被害者はサラリーマンたちじゃん、だから暴行罪で俺が悪いみたいなんだけど、「もう帰っていい」っていうんだよ。おかしいだろ。で、そのお巡りに聞いたんだよ、「あいつらはなにしゃべってんだよ」って。そしたらよお、『ホームレスなんか殴られたなんていったら面子が立たないので、訴えはしません』とかっていうから、俺たち（山口さんとタカさん）は用なしだから、注意だけ受けて帰されたわけ。ふざけんなだろ。な。こっちはいちゃもんつけられたんだから、あいつらを殴るのは自己防衛だろ。それに俺たちを馬鹿にしやがって、ホームレスに殴られたのがそんなに屈辱なのかい。あーいうやつらがいるから、ナカマは襲撃に遭うんだ。あいつらいっぱいしのサラリーマンやってながら、俺たちを人間と思ってないなんて、どういう教育受けてきたんだよ。な、そうだろ。あーいうのが日本のサラリーマンなんだから、そんなのこっちから願い下げだ！

（括弧内筆者）

既述したように、「ホームレス」は社会的構築物に過ぎず、所与のものではない。それは何よりも「ホームレス」が元来自称ではないことに起因する。した

がって山田さんは、「社会」ないし「世間」で言うところの「ホームレス」に、現在の自己を照らし合わせた上でこの語を採用しているに過ぎない。しかし山田さんは、強烈なまでに「サラリーマン／ホームレス」という対立図式を打ち出し、強調する。そこではあたかも「ホームレス」が、「世間」の形象である「サラリーマン」との対立関係において実体的な様相を呈しているのである。ホームレス同士でいるときに、「俺はホームレスだ」などと自称する者はいないが、「ホームレス」ではない者との接触ではたちまち、「俺（たち）」は突如として「ホームレス」という言葉の下に実体化し、その意味が顕在化する。

したがって「ホームレス」が社会的構成物であることを踏まえつつも、同時にそれがホームレスによって用いられる場合とは、その状況と文脈が異なるものであることを確認することは重要であろう。そこでは「ホームレスではないもの」、すなわち「サラリーマン」に代表される「世間」という非ホームレスなるものが、「ホームレス」を実体的存在として立ち現れるための起動装置となっている。

3 揺らぐ「ホームレス」

ホームレスによって「ホームレス」が用いられる時、それは実体的な様相を帯びる。しかし他方で、ホームレスの自己認識にはある種「揺らぎ」が認められる。とりわけこの「揺らぎ」は、寄せ場労働者のアイデンティティを考察した西澤の論旨に近い。

西澤によれば、寄せ場労働者は、労働者間で構築される社会的アイデンティティと、「世間」との間に構築されるそれとの二つのアイデンティティの葛藤を通じてセルフ・アイデンティティを形成するという〔西澤 1995〕¹⁶⁾。労働者間で構築される社会的アイデンティティとは、彼らの「集まり」内の相互作用、さらには「経験の共有」といった共同性によって半ば肯定的に構築されたものであり、一方「世間」との間に構築される社会的アイデンティティとは、「怠け者＝寄せ場労働者」という世間一般の価値観を受けて否定的に構築されたものである。

ここで西澤を引いたのは、寄せ場労働者同様に、ホームレスもまた「二つの社会的アイデンティティの間で揺れ動き、セルフ・アイデンティティを見出し

16) 社会的アイデンティティとは、「あるカテゴリーに分類された人々に対する、社会的に規定されたそのカテゴリーに付随する一切の属性の内容」であり、またセルフ・アイデンティティとは、「自我によって統合された自己イメージの内容」である〔西澤 1995: 105〕。

たり見失ったりする」[西澤 1995: 105]からである。それはまずもって、「ホームレス」としての社会的アイデンティティが、「非ホームレス」による否定的なイメージによって一方的に付与されていることによる。さらに「ホームレスは生得的にホームレスなのではない」にもかかわらず、この否定的なイメージは、本来「ホームレス」ではなかったホームレスにも受容され、彼らの日常的経験や自己認識に反映されてもいるのである。だがこうしたセルフ・アイデンティティは、固定的なものではなく、非常に不安定な基盤の上に成り立っている。ではそのひとつの例として、以下に事例を提示する。筆者は、名古屋でのフィールド中に、時折ホームレスとともに早朝の空き缶集めを行い日銭を稼ぐことがあるのだが、以下の語りには、まさにそのような場面において彼らの「ホームレス」としてのアイデンティティが揺らぐ様子が認められる。

事例 2. 空き缶集めの休憩中、小野山さん（仮名、当時 56 歳）¹⁷⁾の語り（2007 年 6 月、吹上駅近くのコンビニの駐車場にて）

俺もさあ、最初はいやだったよね、カンカン（空き缶集め）。一番やりたくなかったな、うん。でもそうも言ってもらえないよ。食ってかなきゃ人間は死ぬんだから。でもやっぱね、朝、みんな（一般市民）がゴミを捨てにくるじゃない。そこがいわば今の俺が日銭を稼ぐ場所なんだけど、なんか、変な気持ちになるよね。もう結構慣れたほうだと思うけど、最初は恥ずかしくて恥ずかしくて。別にしちゃいけないことしてるわけじゃないんだけど、なんかね、奥さん方の目とかね、子供を連れてるじゃない。「見ちゃいけないよ」って感じで急かすんだよね、子供を。そこでこう、俺も子供好きだからさ、悪いことしちゃったな一つという気持ちになるんだよ。ごめんねって。でもこっちも飯を食わなきゃだしね。まあ、そこは挨拶とかして、悪い人じゃないよってアピールして、だからほら、さっきのおじさん、挨拶してくれたでしょ。これといった会話なんてしたことないけど、挨拶はちゃんとするの。「いつもありがとうございます」って気持ちでね。（挨拶を）返してくれると、やっぱ嬉しいよね。なんていうかさ、挨拶って、お互い（の存在）を認めて合っている証拠じゃんね。俺は昔仕事して

17) 岐阜出身の小野山さんは、勤めていた会社が倒産した 5 年前から、名古屋市内のとある高架下で生活している。空き缶を集めだしたのは、3 年前である。今では週に三回ほど空き缶集めをして日銭を稼ぎ、ボランティア団体による炊き出しを利用しながら日々の生活を送っている。

るとき、挨拶なんてしない人間だったから、そういう意味じゃ、今のほうが人間として成長してるのかもね。はっ、はっ、はっ。...でもね、なんかこーさっ、やっぱこういうこと（空き缶集め）一回しちゃうと、もうやるしかないのよ。世間様には「負け犬」とかって言われても、それでもね。俺もイケイケだった昔はホームレスを見て、「あー汚えなあ」って思ってたよ。誰も好きで空き缶集めてるわけじゃないからさ。でもいざ自分がそれをやるってね、何か捨てちゃった感じがするのよ。一応人に自慢できる経歴なんて無いけどさ、それでも『これをやったらダメだよ』っていう常識はあるよ。...でも悔しいな。もう一度あの頃（ホームレスになる前）に戻りたいなってたまに思う。娘に会いたいしさ、でも認めてもらえないよね。

「お父さん、ホームレスです」って言える人なんていないんだから。俺も逆の立場なら嫌だよ。身内がホームレスなんて。...でも挨拶はするよ。だってそれが人間としての第一歩じゃんか。挨拶できなきゃダメだよ。誰も心は開いてくれないよ。

（括弧内筆者）

小野山さんの語りでは、空き缶集めを始めた当初、強い羞恥心があったことが告白されている。それは、彼の収集ルート付近に居住する一般市民からの「無言のまなざし」と、そのまなざしが「何を語っているのか」を明確に理解している小野山さん自身の非ホームレスとしてのアイデンティティーすなわち「昔はホームレスを汚いと思っていた」という語りーから引き出された告白である¹⁸⁾。しかしそこには単純な「ホームレス／非ホームレス」という対立図式があるだけではなく、「挨拶」という最もベーシックなやりとりを通じた相互関係がある。小野山さんによれば、「自分は昔、挨拶をするような人間ではなかった」にもかかわらず、今では挨拶が互いの存在を認め合う重要な行為であるという。だが、娘に会いたいとは思いつつも、娘には告白できない「俺はホームレスだ」という自認は、娘への思いを自制することとなる。このことは、「俺も逆の立場なら嫌だよ」という言葉に読み取れるように、「ホームレス」として空き缶を集めて生活していることに否定的な感情が伴っていることを示している。

18) 「非ホームレス」としてのアイデンティティが内化されているという意味では、「社会」によって与えられた否定的なカテゴリーとしての「寄せ場労働者」が、労働者たちの否定的なセルフ・アイデンティティを形成する一要素であるとする西澤の論と多少異なる。小野山さんの場合、そのような否定的カテゴリーとしての「ホームレス」に対して、自身もまた否定的な社会通念を付与していたため、それはあくまで小野山さん自身を経由して与えられたものである。

空き缶集めをすることで「ホームレスになってしまった」が、それでも父親として「娘に会いたい」と思う。娘がどのような感情を抱いているのか知る術はないが、しかし「逆の立場なら嫌」だから娘と連絡を取ろうとはしない（あるいは、取れない）。「ホームレスであること」を自認しつつも、しかし小野山さんが「非ホームレス／ホームレス」という対立図式を持ち出さないのは、「ホームレスであること」に負い目を感じ、「ホームレス」である自己を否定的に捉えているからである。では小野山さんの語りの中に見出すことのできる「ホームレスであること」の「揺らぎ」をどのように理解できるだろうか。

4 「ホーム」の意味

そこで本稿では、「ホーム」という概念を試験的に設定したい。ここでいうところの「ホーム」とは、物理的な「家（ハウス）」を意味しているわけではなく、ドミナントな社会において善悪の参照軸として共有されている「常識」といった価値観や倫理観、そしてそれに依拠した「振る舞い」までを広く包含している。「ホームレスが生得的にホームレスなのではない」という再三再四述べたことを踏まえれば、ホームレスもまた、「ホーム」を内化していると想定することができるだろう。それは自己認識のために不可欠な参照軸となっているのである。

しかし「ホームレスであること」への態度が積極的か消極的かによって、「ホーム」の意味は異なってくる。例えばナカマの自転車を蹴っ飛ばされた山田さんは、その主犯である酔っ払ったサラリーマンを罵倒するが、その主な理由は、「ホームレスであること」を馬鹿にされたことであつた。とくに「いっばしのサラリーマン」でありながら、「どういう教育を受けてきたんだ」という最後に吐き捨てた言葉には、「俺はそうではない」といった一種の誇りのようなものを感じる。しかし別の機会に「いつも家族や世間に裏切られてきた」、「人なんて信用ならない」と自己の経験に根ざした社会観を筆者に語っていたことを思い起こすと、事例で取り上げた山田さんの語りは、「ホームレスであること」の誇りというよりかは、非ホームレスの「否定による自己肯定」であつたと考えるほうが正確であろう。換言すれば、それは「ホーム」の否定の上に成立する自己認識である。

他方、小野山さんの語りにおける「ホーム」は、山田さんのように「ホームレス」と明確に対立するものではない。なぜなら「ホームレスであること」に羞恥心を抱いているからであり、逆に言えば「ホーム」の価値観を強く保持し

ているからである。この場合、小野山さんにとって「ホームレスであること」の羞恥心を中和する方法は、「挨拶」を通じた非ホームレスとのやりとりだが、しかしながら、空き缶集めという経済活動を生活の基盤としていることが、彼の「ホームレスであること」を強く規定している。とくにここで興味深いのは、空き缶集めを「仕事」とは言わない小野山さんの態度である。いうなれば彼にとっての「仕事」とは、「ホーム」に属する労働、すなわち「ホーム」にとって意味をもつ労働である。したがって、自己のためだけに日銭を得る自己完結型の経済活動は、小野山さんにとって「仕事」ではない。なぜなら、そのような労働は「社会」にまったく参与していないのであり、その意味で「社会的存在」たりえないのである¹⁹⁾。

ホームレスの日常的経験とその解釈を考察する場合、「ホームレス」として生きながらも、日常的経験を解釈する際に常に重要な参照枠組みとなっている「ホーム」の意味を考えることは重要である。しかし「社会的なるもの」や「世間的なるもの」ともいえる「ホーム」を予め想定しておきながらも、それを「ホームレスであること」に安易に当てはめることは避けなければならない。なぜなら「ホームレスであること」の経験とその解釈の考察を通してのみ、「ホーム」の諸相が立ち現れるからである。したがって重要なのは、「ホームレスであること」の経験とその解釈を焦点化すると同時に、その背後に隠された「ホーム」の具体的な諸相を探っていくことである。そこに彼らの「生きられた経験」を捕捉する契機があると考えられよう。

III 「ホーム」の諸相

1 ナカマにおける「ホーム」

前章では、「ホーム」を参照軸とした「ホームレスであること」の否定的な側面が強調されていたが、しかし彼らの経験とその解釈は、それだけで構成され

19) ホームレスに内化されている「ホーム」と「ホームレス」、そしてその間の揺らぎ、ないし葛藤は、彼らの他者認識にも読み取ることができる。例えば社会福祉学者の岩田が指摘したように、彼らの語りには、「俺」、「(他のホームレスに対する) あいつら」、「世間」という三つの人称がある〔岩田正美 2000: 247〕。このような人称体系は、「我々」と「ホームレス」という二元的な捉え方で収まるものではない。つまり、彼らの語りにしばしば認められるのは、『あいつら』と『俺』は違う」として他のホームレスに対して自己の差別化を図り、『われわれ』＝『一般社会』対『かれら』＝『ホームレス』というような二区分でこの問題を見ようとする外側の視線に対して、『俺』は『ホームレス』という集団に一体化されない〔岩田正美 2000: 247-248〕という自己認識なのである。

ているのではない。時に「ホーム」は全く異なる様相を呈する。たとえば社会学的研究でも度々研究対象とされる「ナカマ」²⁰⁾ [e.g. 北川 2001b; 2002; 山北 2006] という緩やかな、また流動性の高いホームレスの集まりでは、その集団形成とそこでの相互作用を通じて、時として「ホーム」の意味がずらされ、「ホームレスであること」が経験される。

事例 3. 夜 10 時頃、焚き火に当たりながら、ナカマ内での談話（2008 年 11 月
鶴舞公園付近にて）

H さん（当時 63 歳）：いやーもう寒くって寒くって、寝れやしないな。焚き火がなきゃ、やってらんねえーよ。おい、K よお、薪を拾ってきてくれや。

K さん（当時 57 歳）：うんや、わいも寒いし、後でな、後で。

H さん：かぁー！これだからよー、年寄りや、まったく動かねえんだから。まったく K は全然役立んなぁー。

K さん：なにおー！そっちのほうや年寄りだろおーが。

友さん（当時 36 歳）：あーもー、まったく、うるえなーぺちやくちや、ぺちやくちや。少しは静かにせんかい！H さんも K ちゃんも先は短いんやから（笑）。

H さん：なにおー！釜ヶ崎にいたときは、わしだってイケイケだったんやで！三角公園行ってみーや。みんなわしのこと知っとんやから。ホームレスでも誰でもなあ、文句は言わせんかったんやぞ！

友さん：そりゃあんだ、昔の話やろーが。今はここにおるんやから、昔の話なんて関係ねえのつ。ここはみんなで楽しくホームレスやってんだからええの。なぁーK ちゃん。

K さん：そうそう。いいのいいの。

友さん：だってこんなホームレスどこにもおらんぞ。小屋もあつて、ソフ

20) ホームレス同士の関係性の特徴として、「近くもなく・遠くもなく」といった「距離の思想」が挙げられるが、しかし路上での生活は襲撃や盗難などの危険性が伴うため、「ナカマ」は危険から身を守るという実利的な機能を備えてもいる。その場合の「ナカマ」は、利便性に基づいて形成されたものであるが〔岩田正美 2000; 北川 2001b〕, 「ナカマ」内でもめごとや不和によっては、容易にその関係が解消される。だが北川が指摘するように、「特定の野宿者との関係の解消や、その結果としての特定の集団からの離脱や排除は、必ずしもその野宿者の孤立を帰結していない。野宿者数の増大と空間的集積は、集団から離脱したり排除された野宿者があらたに別の野宿者と関係を取り結ぶ機会を絶えず提供している」〔北川 2001b: 71〕。

アーもあって、テレビもあって、毎日酒ばっか飲んで。みんなちゃんと飯食ってる。日本全国探してもいねえぞ、こんなホームレスは。

Hさん：これはホンマすごいわ。みんな、よ一食うて飲んでるしな。寒いだけで我慢すれば、最高の生活よ。誰にも気い一使わんでええしな。人に迷惑かけたらあかんがな。ええのええの。おかしな目で見られても、ええのええの。

友さん：なあ、シュウ（筆者）。うちらは全然人様に自慢できる生活してないけど、それでもみんな一生懸命生きているの。お前は勉強しに来てるんやから、勉強を頑張ればいい。うちらはお前がホームレスじゃないからって差別なんてせえへんから。Kちゃんを見てみい、毎晩毎晩ここで酒飲んで、タダ飯食って。でもええの。それで幸せなんだから。だれもここから出て行けなんて言う権利はないの。そもそもこんなところに住んでるわしらがいいんやから。でも住むとこないんだから、ここでもええやん。Hさんを見てみい、もう死にそうやで（笑）。でもここにいてくれる。それだけでええの。ここはみんなの家なんやから。自分の幸せが一番。他の人の幸せはその次。それでもここにいて幸せならそれでいいの。な、Kちゃん。

Kさん：そうそう。

Hさん：おい、ビールこうてきて（買ってきて）くれや。

（括弧内筆者）

筆者は2007年から現在に至るまで、このナカマたちと同じ釜の飯を食い、同じ場所で寝ているが、この事例と類似する会話はよく耳にするものである。この場面は、11月のある寒い日に、一斗缶に炊かれた焚き火を囲みながら酒を飲み、談笑に明け暮れている時の一場面であるが、ではこうしたナカマの集まりに、「ホームレスであること」はどのように解釈されているのだろうか。

まずもって興味深いのは、Kさんは生活保護者であるにもかかわらず、気の休める「ナカマ」が暮らす路上に毎晩のように通っていることである。ギャングブルでは人一倍真剣なKさんは、基本的に物静かな性格で、積極的にナカマの会話に入ろうとしないが、それでもナカマといることがもっとも安心できる場所であるかのように、毎晩ソファに座っている。他のナカマは誰もKさんの

ことを「ホームレス」だとは言わないが、かつてホームレスであった K さんにとって、アパートでの一人暮らしは精神的に落ち着かないようで、ホームレスたちと多くの時間を共有して日々過ごしている。

このような K さんに対して、他のナカマは何かしらの見返りを期待しているわけでもない。また排除しようともしない。むしろ同じ「ナカマ」として K さんを迎え入れ、ともに酒を飲む。それはこのナカマの中では実質的にリーダー格である友さんがいうように、「自分の幸せが一番」なのであり、K さんが居ることに問題はない。一方で友さんの語りには、「こうした生活」、すなわち公共空間である路上で生活するホームレスの生き方は、決して「自慢できる生活」ではなく、またそこで生活することは「いけない」こととして「ホーム」の論理が引き合いに出されている。しかし路上生活をしていることに対する自省の念は、ナカマとの共存を通じて「幸せの論理」に回収され、「いま、ここ」に在ること、すなわち「ナカマ」として共に集まることの重要性が強調される。

「ナカマ」においても「ホーム」の論理が敷衍されている一方で、「ナカマ」という社会的関係が強調され、「ホーム」はずらされていく。つまり本来結びつきあう必然性のなかった個々のホームレスは、それぞれつながりの結節点として組み込まれていくことで、その経験が肯定的なものへと転換されるのである。しかし友さんの語りが示唆しているように、そうしたつながりは固定的なものでも強制的なものでもなく、流動的かつ寛容的なものである。仮に「ホームレスであること」が、「社会とのつながりを断たれたこと」であるならば、ナカマという集まりは、自己の存在とその意味を紡ぎ出し、他者とのつながりのなかに、社会的存在としての自己を発見ないし確認する場といえよう。つまりナカマとの相互関係において「ホーム」の論理が踏襲されながらも、「ホームレスであること」は山田さんや小野山さんとは異なる意味において解釈されうるのである。

2 無化される「ホーム（レス）」

これまでの事例において「ホームレスであること」はさまざまな場面において異なる様相を呈していた。と同時に、「ホーム」という指標を以ってして、「ホームレスであること」の経験とその解釈が紡ぎ出されている。しかし時として「ホームレスであること」は、その意味そのものが失われることさえある。

事例 4. 名古屋市内に家をもつ大久保さん（仮名、当時 42 歳）の語り（2007

年8月、大須観音近くのある喫茶店にて)

いやー俺も悪いことしちゃってさ、刑務所に入って、出所したらすぐ奥さんが死んじゃって。娘二人を一人で育てたんだよ。高校卒業までね。一人はもう結婚しちゃったよ。たまに連絡取るんだよ。「元気ー？」ってね。この間なんて、「パパ一緒に住もう」なんて言われちゃって。はは、いい娘だよ。孫もできたし、そろそろ「ホームレス」やめて、来年はさ、友達が仕事くれるっていうから、そっちでお金稼ごうかなって。家はあるんだよ。ほら、××区にさ。でも娘はどっちも名古屋にはいないし、一人ぼっちの家に帰るのもさ、なんか寂しいのよ。人間は一人じゃ生きていけないんだから、支えあっていかなきゃ。だろ？それにナカマの苦労も知ってるしさ。仕事はないし、お金はないし、あるものっていったら、ほら、ナカマじゃんか。俺は生活にすこし余裕があるからいいんだよ。いつも「大久保さん、お金貸してって」って言われたら、「ほらよっ」って貸すんだよ。戻ってくるなんて期待してないな。だってそれで「金返せって」って言うてみ。みーんな寄り付かなくなっちゃうだろ。それは寂しいだろー。だからいっぱい貸さないよ。俺も自分の生活があるんだから。日雇いで稼いだ金だって、いっぱいあるわけじゃないからね。だからホームレスっていつでも、みんな悪い人たちじゃなくて、寂しい人たちなんだよ。俺もさ。みんな支えあっていかなきゃ。そりゃみんな他人だけどさ、「おはよー」とか、そういうのでいいんだよ。人と人なんてそういうもん。ホームレスだろうが、普通の人のだろうが、みーんな一緒。関係ないのよ、人間一人じゃ生きていけないわけ。

来年には友人の紹介で仕事に就き、名古屋市内にある自分のアパートで暮らすといていた大久保さんは、2010年現在でも名古屋市内の路上で生活している。2007年に語った彼の「今後の予定」の真偽は結局のところ不明だが、印象的なのは、彼が頻繁に発する「人間一人じゃ生きていけない」という言葉である。これは単なる思想ではなく、彼の日常的経験の根底に横たわるリアリティである。確かに大久保さんは先に見たような「ナカマ」を形成しているわけではない。彼がいうところの「ナカマ」とは、日雇労働や、空き缶集めでよく会う仕事仲間である。しかし彼にとって、そうしたナカマたちと交わされる会話は、「生きる意味」そのものでもある。また、「寂しい人たち」という大久保さ

んの「ホームレス」観において、積極的な意味が付与された相互関係では、「ホームレス」も「非ホームレス」も、何ら区別すべき社会的カテゴリーではない。そこでは「ホーム」の意味が「一人では生きていけない人間」という一点において無化するのである。したがって大久保さんにとって、その経験を参照するための「ホーム」は、「非ホームレス／ホームレス」として相互に排他的なものではなく、その区別さえも意味をなさない、「人間同士の社会関係」という倫理的価値に根ざしている。それは恐らく、娘との良い関係をもち、市内に家（ハウス）をもつという意味で一般的に言うところの「ホームレス」でもなく、しかし実質的に路上生活をしているという意味で「ホームレス」でもあるという、どちらにも属さない大久保さんに特有の状況だからかもしれない。だが皮肉なことに、大久保さんもまた、「路上で生活している」という可視的な点において、支配的な社会からは「ホームレス」とみなされ、その生の固有性は単一の社会的カテゴリーへ押し込められるのである。

おわりに

本稿は日本のホームレスを対象に、彼らの「生きられた経験」に焦点を当てた。ここでいう「生きられた経験」とはすなわち、「ホームレスであること」の日常的経験とその解釈である。とりわけ本稿は「ホームレス」と「ホーム」という二つの概念を手がかりに、「ホームレスであること」の基本的特徴が、「ホームレスは生得的にホームレスなのではない」という事実に依拠していることを確認し、その重層的なリアリティの提示を目指した。

「ホームレス」として表象されることで逆に不可視となるホームレスの多様なないし複数性は、「ホームレスであること」がホームレスにとってどのような事態であるのかを考察することなしに捉えきれものではない。確かに「非ホームレス／ホームレス」という対立図式を明確に打ち出す山田さんの語りでは、一般的な言説のように、「ホームレス」は実体的様相を呈し、「ホーム」の否定を通して肯定的に解釈される。一方、小野山さんの語りでは、「ホームレスであること」自体が否定的に解釈されていた。しかし三章で見てきたように、「ナカマ」という緩やかな集まりにおいて、ホームレスは個々の存在理由をその内に見出し、「ホームレスであること」の経験を肯定的に構築していた。そこでは「ナカマ」として結びつく「つながりの論理」に、社会とのつながりを断たれた「ホームレスであること」の一側面が解釈され、翻訳され、「幸せの論理」へと回収

される。また時として「ホームレスであること」そのものが無化されることもあった。

ホームレスに内化されている「ホーム」が、「ホームレスであること」の参照軸として機能し、それがホームレスの日常実践を構成しているということが、本稿の基本的主張であり、結論である。それは社会問題カテゴリーとしての「ホームレス」の問題性に自覚的でありつつも、そこから出発しなければ捕捉することのできない、「ホームレスであること」の意味とそのリアリティに向けられたものであった。本稿が、「野宿者研究」ではなく、「ホームレス研究」を掲げたのは、まさにこうした理由にある。

今後は個々のホームレスを取り巻く社会環境を視野に含め、ライフヒストリーや日常的な社会的・経済的活動と照らし合わせながら「ホームレスであること」の具体的様相を記述していくことが必要であろう。と同時に、「ホームレスであること」の固有性がどのような日常的経験によって構成されているのか、その具体的様態についても記述を蓄積していくことが必要である。なぜなら「ホームレス研究」にとって目下必要な作業は、彼らの経験的世界の民族誌的記述を書き重ねていくことを通じて、「ホームレス」という「生きた概念」を、個別具体的な文脈に沿って考察することだからである。それは本質主義的に解釈されがちな「ホームレス」という社会問題カテゴリーを脱構築し、「非ホームレス／ホームレス」という支配的な二項対立的見解に対して、ホームレスの生の固有性と多様性ないし複数性を提示していく地道な作業でもある。本稿がそのための第一歩に値するものであることを願いたい。

謝 辞

事例で取り上げた方々をはじめ、名古屋市で出会った「ホームレス」と呼ばれている方々には多大なる調査協力を戴きました。また本稿執筆にあたり、査読者の方々から多くの貴重なご助言を戴きました。この場を借りて、厚くお礼申し上げます。

参考文献

アンダーソン, N

- 1999 『ホーボー——ホームレスの人たちの社会学（下）』 広田康生（訳），東京：ハーベスト社（Anderson, N. 1923. *The Hobo: The Sociology of the Homeless Men*, Chicago: The University of Chicago Press）.
- 2000 『ホーボー——ホームレスの人たちの社会学（下）』 広田康生（訳），東京：ハーベスト社（Anderson, N. 1923. *The Hobo: The Sociology of the Homeless Men*, Chicago: The University of Chicago Press）.

青木秀男

- 1989 『寄せ場労働者の生と死』 東京：明石書店.
- 1996 「野宿者と現代都市——野宿者の形成と概念をめぐって」『都市と都市化の社会学』 井上俊（編），131-149 ページ，東京：岩波書店.
- 1999a 「寄せ場——差別と意味の社会学」『場所をあけろ！——寄せ場／ホームレスの社会学』 青木秀男（編著），23-43 ページ，京都：松籟社.
- 1999b 「寄せ場は何所へ」『場所をあけろ！——寄せ場／ホームレスの社会学』 青木秀男（編著），257-281 ページ，京都：松籟社.
- 2000 『現代日本の都市下層——寄せ場と野宿者と外国人労働者』 東京：明石書店.

デーヴィッド，L（編）

- 2007(2004) 『世界ホームレス百科事典』 田巻松雄（監訳），東京：明石書店（David, L. (ed.), *Encyclopedia of Homelessness*. Thousand Oaks, California: Sage）.

ギル，トム

- 2007 「ニンビー現象における排除と受容のメカニズム」『排除する社会・受容する社会——現代ケガレ論』 関根康正・新谷尚紀（編），2-32 ページ，東京：吉川弘文館.

郡昇作

- 1976 『釜ヶ崎——どん底の職業とその実態（復刻版）』 大阪：新和出版社.

林光一

- 1976 『ルンペン学入門——放浪の詩』 東京：ベップ出版.

林真人

- 2004 「野宿者研究における『経済と社会』の諸相」『日本都市社会学会年報』 22: 137-154.
- 2006 「若年野宿者の形成と現存」『社会学評論』 57(3): 493-509.

平川茂

- 2003 「ホームレス生活者の歴史と現在」小玉徹・中村健吾・都留民子・平川茂（編）『欧米のホームレス政策（上）——実態と政策』京都：法律文化社．

生田武志

- 2005 『〈野宿者襲撃〉論』京都：人文書院．

今川勲

- 1987 『現代棄民考——「山谷」はいかにして形成されたか』東京：田畑書店．

岩田圭司

- 1999 「野宿者の形成過程と生活様式——名古屋市における予備的研究」『名古屋大学社会学論集』20: 133-158．

岩田正美

- 2000 『ホームレス／現代社会／福祉国家』東京：明石書店．

- 2007 『現代の貧困——ワーキングプア／ホームレス／生活保護』東京：筑摩書房．

笠井和明

- 1995 「いわゆる『ホームレス』問題とは——東京・新宿からの発信」『寄せ場』8: 5-14．

狩谷あゆみ

- 2001 「カテゴリー化の暴力性——神戸市の野宿者問題をめぐって」『解放社会学研究』15: 75-97．

- 2002 「野宿者襲撃をめぐると問題構成」『社会的排除のソシオロジ』広島修道大学研究叢書第122号, 31-52．

北川由紀彦

- 2001a 「野宿者急増の背景についての一考察——建設業と寄せ場に注目して」『社会学論考』22: 17-35．

- 2001b 「野宿者の集団形成と維持の過程」『解放社会学研究』15: 54-74．

- 2002 「野宿者の貧困と集団形成——新宿駅周辺部を事例として」『カネと人生』小馬徹（編），245-267 ページ，東京：雄山閣．

工藤英一

- 1933 『浮浪者を語る』東京：大同館書店．

厚生労働省

- 2003 『ホームレスの実態に関する全国調査報告書』東京：厚生労働省．

- 2010 『ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）の結果』東京：厚生労働省．

中根光敏

- 1998 「都市空間に於けるストリートをめぐるポリティクス——野宿者問題の再構成にむけて」『差別問題の構成をめぐる社会的ダイナミズム』広島修道大学研究叢書第 104 号, 1-39.
- 1999a 「現代日本社会における都市下層の変貌——野宿者の可視化が意味するもの」『日本都市社会学会年報』17: 39-52.
- 1999b 「排除と抵抗の現代社会論——寄せ場と『ホームレス』の社会学にむけて」『場所をあけろ！——寄せ場／ホームレスの社会学』青木秀男（編著），75-95 ページ，京都：松籟社．
- 2002 「社会問題の構成／排除——野宿者問題とは何か？」『社会的排除のソシオロジ』広島修道大学研究叢書第 122 号, 1-29.

西澤晃彦

- 1995 『隠蔽された外部——都市下層のエスノグラフィー』東京：彩流社．
- 1997 「都市下層としての野宿者——『ホームレス問題』とその構造的背景についてのノート」『現代日本社会に於ける都市下層社会に関する社会学的研究』田巻松雄（研究代表），文部省科学研究費補助金総合研究（A）成果報告書，79-90 ページ．
- 2005 「檻のない牢獄」『貧困と社会的排除——福祉社会を蝕むもの』岩田正美・西澤晃彦（編著），263-284 ページ，京都：ミネルヴァ書房．

社会政策学会（編）

- 1999 『日雇労働者・ホームレスと現代日本』東京：御茶の水書房．

島和博

- 1999 『現代日本の野宿生活者』東京：学文社．

田巻松雄

- 1999a 「笹島」『場所をあけろ！——寄せ場／ホームレスの社会学』青木秀男（編著），71-74 ページ，京都：松籟社．
- 1999b 「寄せ場を基点とする社会学の射程——『中央』と『周辺』および『勤勉』と『怠け』をキーワードにして」『場所をあけろ！——寄せ場／ホームレスの社会学』青木秀男（編著），47-70 ページ，京都：松籟社．
- 1999c 「寄せ場と行政——笹島を主な事例として」『場所をあけろ！——寄せ場／ホームレスの社会学』青木秀男（編著），227-253 ページ，京都：松

籟社.

- 2003 「野宿者の増加と日本社会の変化——製造業労働市場のグローバル化との関連を軸に」『寄せ場』16: 90-109.

田巻松雄・山口恵子

- 2000 「野宿者増大の背景と寄せ場の変容——『山谷, 上野調査』からみる飯場労働の実態」『寄せ場』13: 76-90.

東京都企画審議室

- 1995 『新たな都市問題と対応の方向——「路上生活」をめぐる』, 東京都.

妻木進吾

- 2003 「野宿生活:『社会生活の拒否』という選択」『ソシオロジ』48(1): 21-37.

山北輝裕

- 2006 「野宿生活における仲間というコミュニケーション」『社会学評論』57(3): 582-599.

山口恵子

- 2001 「東京・山谷にみる包摂と排除の構造——野宿者増加と寄せ場の変容について」『解放社会学研究』15: 26-53.

Baxter, Ellen. and Kim Hopper.

- 1981 *Private Lives/ Public Spaces: Homeless Adults on the Streets of New York City*, New York: Community Service Society.

Desjarlais, Robert.

- 1997 *Shelter Blues: Sanity and Selfhood among the Homeless*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Glasser, Irene.

- 1994 *Homelessness in Global Perspective*, New York: G. K. Hall.

Glasser, Irene. and Rae Bridgman.

- 1999 *Braving the Street: The Anthropology of Homelessness*, New York: Berghahn Books.